



TITLE:

<批評・紹介> 森鹿三 「神農本經所
載藥品について」

AUTHOR(S):

渡邊, 幸三

CITATION:

渡邊, 幸三. <批評・紹介> 森鹿三 「神農本經所載藥品について」. 東洋
史研究 1955, 13(6): 536-539

ISSUE DATE:

1955-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/139022>

RIGHT:

神農本經所載藥品について

森 鹿 三

昭和二十九年十一月 京都大學人文科學研究所
創立廿五周年記念論文集所收

森教授は京大人文科學研究所の「創立廿五周年記念論文集」に、
「神農本經所載藥品について」と題する卓見を發表された。明の盧
復、清の孫星衍・孫馮翼、我國の森立之等の神農本經復原の成果を
歷述され、そのおのにおのに本草文獻學的な批評を加えられ、さらに

その諸人の品目増減分合の緣由をさぐり、本經品三百六十五種の藥名を擬定された。森教授としては、中國生藥の產地調査の副産物に過ぎないかは知らぬが、さすがにその考證は精微を極め、森教授ならではの感を深くするものである。しかし全篇を再讀すると、いささか鄙見と異にする所がある。本誌をかりて鄙見を述べ、森教授の高教を仰ぎたいと思う。

森教授は第五項に、盧復以下の見解を異にする品目を、aよりiに至る十二條を擧げ、之を批判することによって、本經品を擬定せんとしていられる。その中、a・c・e・fの四條を除く外は、誠に御説の通りであつて、間然すべくもないが、上記の四條には、いささか見解を異にするものがある。

(一)「a 玉石部中品の鐵精・鐵落・鐵を一條とすること(孫氏・森氏)」の條下には、森教授は、「單に同類品を合併しただけで、別に根據はないようである」と簡単に解決しておられる。

案するに仁和寺藏新修本草殘本には、鐵落・鐵・鐵精の順に排列し、鐵精の條下にのみ陶氏集注があり、しかもその集注は、この三者を包括する注である。由來、陶氏の集注は、例えば射罔・鳥喙を附條とする鳥頭に於て見られるが如くに、數品が共條している時は、その最後に各品を包括する注を加えるのが例の如くに思われる。この陶氏の書式から推すと、鐵落等の三者は共條のものと見得るのはなからうか。

(二)「c 玉石部下品の戎塩・大塩・鹵鹹を一條とすること(孫氏・森氏)」の條下に於ては、森教授は、「(1)と同じく同類品を合併したという以外に根據はないようである。却つて「本草經」の七情條例に大塩の名が見えることから、三者共條ではなかつたかと思われ

る」と言つておられる。

案するに、新修本草殘本は、鹵鹹・大塩・戎塩の順に排列し、鹵鹹の條下には「是煎塩釜下凝滓」なる陶注があり、大塩の條下には「漏蘆爲之使」なる相使の文があり、戎塩の條下には詳細な陶注がある。一見しただけでは、(1)の場合と異なり、鹵鹹に陶氏注があるからして、この三者は別條したが如くに思える。ここに注意すべきは、戎塩の條下の注であつて、それはただ戎塩のための注ではなくして、鹵鹹・大塩のための注である。即ちこの三者の注を包括して戎塩の條下に書かれたものである。ここに重點を置いて考えると、この三者も亦共條したものであることが疑われる。今鹵鹹條下の「是煎塩釜下凝滓」なる陶注を考えると、その内容は、戎塩條下の陶注の鹵鹹に關する注文とはほとんど關聯がなく、従つて陶弘景と新修本草との間に、何人かが増補した文とも疑われる。假にこの注が陶氏の原有の文であつたとしても、非常に簡單な文であるから、陶弘景は之を獨立した一條の注文とは取りあつかわず、輕く附注の如くに見ていたとも思える。次に大塩條下の「漏蘆爲之使」なる相使の文は、神農本草經原有の文であるから、この一文の存在は、陶氏共條の場合の書式と抵觸する所はない。鹵鹹等三者の中で、七情の記載のあるものはただ大塩のみであるからして、七情條例に大塩の名が見えたのである。七情條例に大塩の名が見えるからして、三者がそれぞれ分條していたと疑われる森教授の説は成立しないと思われ。

しかし、鹵鹹の陶注に對しては、上述のように私の假説によつて否定したのであるからして、これだけでは三者が共條したと斷定することはできない。更に積極的な根據を必要とする。

案するに太平御覽卷九八八石薬下には、

「本草經曰。鹵鹹一名寒石。味苦。治大熱消渴狂煩。戎塩主明目益氣。去毒蟲。大塩一名胡塩。令人吐。主腸胃結熱。」
卷八五七にも同様の本草經を引用する

なる文を引用している。御覽所引のこの本草經は、別に專稿を草して述べるが如くに、薬名↓一名↓薬性↓主治なる書式からして、陶弘景の纂定以前の神農本草經であると思われる。今御覽所引の本草經につき、二種の薬品を共條してあるものには、石決明と草決明八八海蛤と文蛤同、大豆黄卷と生大豆卷八がある。中につき石決明と草決明、海蛤と文蛤とは、陶氏集注に明らかな如く、本經に於ては共條していたのを、陶弘景が分條したものであり、大豆黄卷と生大豆は、その目録注によつて明らかなであるが如くに、開寶本草に至つて分條されたものである。以上の石決明以下によつて、御覽所引の本草經に共條されるものは、その本經に於て元來共條されていたものであることが知られる。之により、御覽所引の本草經に、鹵鹹の三者が共條されているから、本經に於ても共條されたことが推定されるであらう。

(三)「e 木部下品の鼠李を郁李仁に附載すること(森氏)」の條に、森教授は「全く異類のもので、これを共條にした理由を見出し得ない」とされている。

案するに、新修本草殘本森氏によるでは、郁核の次に鼠李を置き、その陶注に、「此條又附見。今亦在副品限也。」とある。この陶注は證類本草には脱落している。森教授が(g)の條に言われるが如くに、「森氏が兩者を共條にしたのは、實にこの天壤間絶無僅有之祕笈と稱せられる新修本草のみに傳存する陶注にもとづいての措置なのである」。

(四)「f 獸部中品の牛角觶を上品の牛黄に附載すること(森氏)」の條に就いては、森立之は牛角觶・髓・膾の本經の文は、本經では牛黄の條下に附載してあったのを、陶弘景が之を一括して分條したとするに對し、森教授は本經には既に牛黄と牛角觶・膾の兩條があり、陶弘景は牛黄の附條となつていた牛膾をば、牛角觶の條に改置したと解しておられる。之は全く森教授の苦心の結果に出たものと思われ、全く頭のさがる感にたえない。

この兩説の是非を決定することは容易ではないが、兩説の相異は之を要するに、

「此朱書牛角觶髓其膾本經附出牛黄條中。此以類相從耳。非上品之藥。今拔出。隨例在此。不關件數。猶是墨書副品之限耳。」

なる陶氏集注の解釋如何に在る。しかもその中心問題は「其膾」の「其」の解釋に在る。森立之は「と」「および」と解し、「牛膾句」を上屬して讀み、森教授は「その」と解し、「牛膾」を下屬して讀まれたのである。

「其」の字を如何に讀むかは結局水かけ論になる恐があるので、私は他の方面から之を考えたと思う。

先ず證類本草について、髓・膾の書式を見ると、髓には、「髓補中填骨髓。久服増年。髓味甘溫無毒。主安五藏。……」横線を附せる文は神農本草經の文。下皆之に倣う。又膾には、「膾可丸藥。膾味苦大寒。除心腹熱渴。……」とある。この書式は本草經の一般の書式と異つてゐる。一般の書式ならば、「髓味甘溫無毒。補中。填骨髓。久服増年。主安五藏。……」「膾味苦大寒。除心腹熱渴。……可丸藥。」と書かれる筈である。かかる常に異なる書式、および「髓……髓……膾」と本經と名醫とに薬名が重出してゐることは、共にその本經の文が挿入されたことを示すもの

と思える。従つて髓も亦臍と同じく、その本經の文は、陶弘景によつて牛黃から移置されたものと言ひ得よう。

次に、森教授は陶注の「不關件數」につき、もし森氏のように分合するならば、それは件數に關する。……上品の牛黃附載の臍を、中品の牛角鰓條下に移置したとすれば、件數すなわち藥數にかかわりがない」と述べておられる。案するに、文始の陶注には、「此既異類而同條。若別之則數多。今以爲附見而副品限也。」と言ひ、薤の陶注には、「葱薤異物而今共條。本經既無非。以其同類故也。今亦取爲副品數。」とある。之等副品に關する陶注の文は、いずれも本經三百六十五種の數を保持するが爲に、その一條の存在が本經品數を増加する疑のある時に書かれてゐる。従つて牛角鰓の陶注の「不關件數」は「牛角鰓の全條を副品と見なすからして、本經の品數には關係しない」と解すべきであらう。若し森教授の如くに、牛黃條下の臍を、牛角鰓條下に移置したただとすれば、それは當然本經品數に關係はなく、従つて副品に關する陶注は無用であると思われる。以上の二理由からして、私は森立之の附載說に賛成したい。しかば、「其臍」を如何に讀むか。森立之はその本草經放注に、

「其臍之其字。卽是臍之假字。經傳作𦵏。……爾雅釋詁。𦵏與也。初學記卷八州郡總敘云。隋文帝受周禪。至開皇三年罷天下郡其縣。但隸州而已。此其字與陶注同文例。蓋亦猶與也。」

と言ひ、「其」を「と」「および」と解している。立之の考證の是非は別として、私は上述の理由からして、「其臍」を上屬して讀み、「其」を「と」「および」の意味に解したいと思う。

(五) 森教授は三百六十五なる本經品數に合するために、孫氏說により、證類本草では墨書して名醫品とする升麻・粟米・黍米を本經

品に升格させておられる。中につき、升麻は太平御覽九〇所引の本草經は、藥名↓一名↓藥性↓出所山谷等の一經的體的地名↓主治↓產地益州等と言ふ最も典型的な神農本草經の書式でかかれておるのみならず、御覽所引の「吳氏本草曰。升麻神農甘」なる傍證もあるからして、升麻が本經品であることには、何等の異存はない。しかし粟米・黍米は、御覽所引の吳氏本草の「陳粟。神農黃帝苦。」八四〇「黍。神農甘無毒」八四二を唯一の根據とするだけであるから、之を本經品に升格さすことについては、一沫の不安を感じる。その是非はしばらく保留したいと思う。

(六) 結語 以上により、粟米・黍米はしばらく保留するとして、森教授の擬定された本經品三百六十五種の中、私は鐵落・鐵・鐵精を、鹵鹹・大塩・戎塩を、郁李仁・鼠李を、牛黃・牛角鰓を夫々一條に合條した結果、六種が不足するようになった。この六種が何品であるかを決定することは容易ではないが、森教授によつて、その他の三百五十九種の本經品がほぼ確定された今日、殘餘の六種の擬定も不可能ではなからう。

由來、森立之等の神農本草經復原は、専ら新修本草・證類本草を中心として行われた。しかし之等と系統を異にするものには、大した研究は行われていない。私は森立之等が看過した諸書に注意を拂いたいと思う。この意味からして、太平御覽所引の本草經、孫思邈の千金要方、巢元方の諸病源候總論等の隋唐醫書の徹底的研究を提唱したい。今回御覽所引の本草經を調査した結果、昆布・占斯・石師・石脾・盧精・忍冬の中の若干が、本經品に升格し得るのではなからうかと疑っている。いまだ結論を得ていないから、後日教正を得たいと思う。

(渡邊幸三)